

## 立山における地蔵信仰(2)

多賀 康晴

### はじめに

2017年3月31日に発行した『富山県〔立山博物館〕研究紀要 Vol. 23』では、「立山における地蔵信仰」というタイトルで、地蔵信仰の概要と、立山・芦峯寺における地蔵信仰の実態を紹介した。しかし、そこでは「立山曼荼羅」に描かれる「賽の河原の地獄」について触れることができなかった。そこで、本稿において、「賽の河原」と立山信仰の関係を紹介していくとともに、富山県内における地蔵信仰の広まりについても、民話に焦点をあてて見てみたい。

### 1. 賽の河原

#### 1-1 立山と賽の河原

##### 1-1-1 立山山中の賽の河原

全国各地に地獄谷と名づけられたところは数多くあるが、その中でも立山の地獄は、『往生要集』（源信、寛和元年〔985〕）に詳細に描かれる地獄の実相を表すものとして人々に知れ渡ることとなり、『本朝法華験記』（長久年間〔1040～44〕）や『今昔物語集』（12世紀前半）にも登場する。その景観について、佐伯幸長氏は「立山の地獄は仏説と現実との組み合わせを巧みになし、所謂八大地獄、十六別所一百三十六地獄の形相があり、その現実の状態によって、八満、無限、焦熱、等括、叫喚、鍛冶屋、団子屋、紺屋、百姓等々、或は血の池或は八寒などと称してそれぞれの生前の悪行によって、これらの地獄に落ちるといい、更に進んで越中の立山に行けば死んだ人に会えるとまでいいはやらせた」と書き記し、さらに「その上なおこの地獄に合せて近くに三途の川あり、死出の山あり、幼児の死後の哀れな姿を描く賽の河原あり」と、賽の河原の存在についても触れている。そして、「賽の河原は別山と雷鳥沢の間の川原でケルンが沢山できている。」と、その場所を紹介している<sup>(1)</sup>。また、佐伯立光氏は「立山では、別山より大走・小走という坂道を下った処に広い河原があり、数知れない程、小石を以て塔を積み地蔵菩薩の石仏も点々として建立されて、古来より賽の河原と称して、死んだ子供に会いたいならば、立山の賽の河原に参詣すれば、必らず我が子に会うことができる」と云い伝えられ、往昔は夏になると、多くの人がこの地に参詣され、また熱心な信者によって、地蔵菩薩の石仏なども建立され、明治維新までは数百体も存置されていたものであったが、現在は僅少となり、昔日の面影は全くないといった現状である。」と述べている<sup>(2)</sup>。

平成8年から9年にかけて行われた立山地獄谷・賽の河原一帯の石造物調査の結果、賽の河原で6体の地蔵菩薩像が確認されている。そのうちの3体（SK-1・SK-2・SK-5）は、総高33～35cm、最大左右幅（蓮花座）22～24cm、最大奥行（蓮花座）17～18cmの丸彫り地蔵坐像で、同質の安山岩を用い、大きさ、プロポーション、細部の調成も同じくし、持物はSK-1が両掌に大きな宝珠、SK-2が宝珠と錫杖、SK-5が幢幡とみられることから、六地蔵を構成する内の3体であったと考えられる<sup>(3)</sup>。

### 1-1-2 立山曼荼羅に描かれる賽の河原

立山信仰では、地獄は山中に存在するとされる。実際、立山山中には、現在も硫黄成分を含んだガスや多量の熱湯が湧く地獄谷と呼ばれる地帯があり、『今昔物語集』にも、「日本國ノ人、罪ヲ造リテ多ク此ノ立山ノ地獄ニ墮ツトイヘリ」と記され、古来より人々に恐れられてきた。「立山曼荼羅」では、「針の山」にたとえられた劔岳の下方、画面左側中央を中心に、大きく地獄が描かれる。そして「賽の河原」は、別山の下方、ちょうど玉殿窟と地獄を結ぶように描かれることが多い。これは、立山の实景に近いとともに、賽の河原の象徴する意味合いとも通じているとみられる。「賽の河原」の「賽」は「塞」であり、また「障」であって、外敵の侵入を阻止する「境界」の意であることは、民俗学その他の見地からつとに指摘されているところである<sup>(4)</sup>。立山曼荼羅の中で、室堂や玉殿窟と地獄との間に描かれているのも、この世とあの世の「境」、地獄道や餓鬼道、畜生道の悪道への入口として、賽の河原が位置づけられていることを表していると考えられる。

## 1-2 賽の河原

### 1-2-1 「賽の河原」とは

一般に「賽の河原」は、三途の川の河原もしくは死出の山路の裾野の河原にあり、幼くして亡くなり親を悲しませたり、親の恩に報いる孝行ができなかった罪でこの冥界に墮ちるといふ。子供の亡者たちは娑婆の父母兄弟供養のためと石積みをして遊ぶが、日が暮れると地獄の鬼がやってきて、子供たちがせっかく造った塔を崩してしまう。そこへ地蔵が現れ、自分をこの世界の親と思えと、子供たちを鬼から守ってくれる。河原・子供の亡者・石積み・鬼・地蔵の5つを基本構成要素とする世界である<sup>(5)</sup>。

亡くなった子供が「賽の河原」に行くのは、一つには、村境を横切る荒れ川の周辺に荒涼たる礫土を見た人びとの想いが、地獄の「賽の河原」のイメージを招き寄せたこと、また一方で、柳田国男が、「さい」を「境」と重ねて、赤子の埋葬地が村境の荒蕪地であったと指摘し、これらいたいけないものたちの霊の寄り集うところと見るところからきていると考えられる。埋葬の仕方も大人とは異なり、子供専用を整えられていることが多かった。死児を棺内に正座させ、太陽に向けて合掌させて埋葬するという方法は、柳田国男の言を借りれば「出てきやすいやうにしようといふ趣意が加はって」組み立てられ、一日も早い再生を祈る親の想いを伝えるようである<sup>(6)</sup>。

河原での「石積み」は、作善としての遊びである。『法華経』「方便品」のなかの偈に、「乃至、童子の戯れに沙を聚めて仏塔を為れる。かくの如き諸の人等は、皆、已に仏道を成じたり」、「乃至、童子の戯れに、若しくは草木及び筆、指の爪甲をもって、画いて仏像を作る。かくの如き諸の人等は、漸漸に功德を積み、大悲心を具足して、皆、已に仏道を成じ、但、諸の菩薩のみを化して、無量の衆を度脱せり」とある。「石積み」という戯れも作善的行為として認め、救済にあずかるのである<sup>(7)</sup>。

地蔵は「子供」と関係が深く、『今昔物語集』巻十七にいくつも掲載される地蔵説話では、地蔵は「端巖ナル小僧」の姿で地獄にも娑婆にも化現した。地蔵が子供の姿で化現するのは、女性や老人と並んで童子を霊託の媒介者とするシャーマニズム的観念が日本古来根強い中で、現世と他界を媒介し両義的存在としての機能を持つ子供と、縁有る衆生を救うために現世と地獄を往来する地蔵とが習合した姿と考えられる<sup>(8)</sup>。ところで、賽の河原で子供が際限なく行っている石積みは、子供にとってみれば日常の行為であり遊びである。子供は「石積み」を苦行とする大人の思惑を越え、粹組みからはみ出して異人性を際立たせている。「賽の河原」が物語るのは、生と死、此岸と彼岸、苦役と遊びなど、あらゆる隔てを無化して両界を自在に往還する「子供」らの境界者的特質であり、彼岸ですら保護者を不可欠とする被保護性である。そして「地蔵」は「子供」と「賽の河原」の両界性を石の軀に封じ込めて、村の境界や街の辻々にたたずむのである<sup>(9)</sup>。

### 1-2-2 六道絵に描かれた賽の河原

賽の河原は、さまざまな民衆宗教絵画に描かれた。現存する賽の河原の最も古い図像は、室町時代（15世紀）の作とされる向嶽寺蔵「十王図」のなかの都市王幅の図像で、墳丘の麓に、地蔵と地蔵に取りすがろうとする子供たち、石積みをする子供たちが描かれている。鬼は描かれていない<sup>(10)</sup>。出光美術館蔵の「六道絵」（16世紀）第一幅にも、地蔵と石積みをする子供が描かれている<sup>(11)</sup>。

「六道絵」の研究を行った鷹巣純氏によれば、出光美術館本「六道絵」第一幅では、三途の川にかかる橋の此岸側に奪衣婆が配され、橋は地獄の方向へ向かって伸び、その上を渡る亡者も地獄へ足向けが、注目すべきは、亡者が地蔵菩薩に先導されるということである。悪道からの救済者である地蔵が亡者を地獄へと導く可能性はあり得ない。しかも亡者は地蔵に対して合掌礼拝している。従って、ここでなされているのが悪道からの救済であることは明白である。地蔵と亡者が目指しているのは此岸でも悪道でもなく、救済の地であり、三途の川に架かる橋を「悪道へ向かう橋」から「悪道からの救済の橋」という意味内容を付加しているのである。さらに、16世紀末葉に描かれた長岳寺本六道十王図では、悪道の入口である第二幅に加えて第八幅、悪道の向こうに現れた川にも橋が架けられている。そして、悪道を出て行く亡者が、その橋の上でまさに阿弥陀聖衆の来迎を受ける。これにより、悪道は罪業に苦しむ場所から、「めぐり渡り通過されてゆくもの」として明確に意識されるようになったのである<sup>(12)</sup>。

こうした「救済の道」としての六道十王図の構造は、おそらく山中他界観と密接な関係を持っていると思われる<sup>(13)</sup>。

### 1-2-3 「熊野観心十界曼荼羅」と「立山曼荼羅」に描かれた賽の河原

「熊野観心十界曼荼羅」は、代表的な江戸時代の民衆宗教絵画のひとつで、熊野比丘尼たちが勧進活動のうちに、主に女性たちを相手に絵解きされたものである。ここで注目されるのは、現世と悪道とが両端で結びつき、一個の円環を形成していることである。この構造は、現世と他界が我々の身をおく全世界のそれぞれ半ばであることを示している。そしてこの円環構造は水尾本六道十王図の構造に通じる<sup>(14)</sup>。

賽の河原は、その中のほぼ中央にほかの図像に比してやや大きめに描かれる。そのことは、当時の人々の死生観に占める賽の河原の持つ意味の重さを示唆すると考えられるが、そこでは、子供と地蔵と石積み・石塔の三要素で表現されている<sup>(15)</sup>。

また、「立山曼荼羅」は「熊野観心十界曼荼羅」の影響を受けているが、賽の河原はほとんどの「立山曼荼羅」に描かれ、その多くは画面上部中央付近の、別山の下、立山地獄の上方に描かれている。図像は様々であるが、基本的に地蔵と子供と石積み・石塔の三要素で表現され、「熊野観心十界曼荼羅」と同じである。

「熊野観心十界曼荼羅」と「立山曼荼羅」は、ともに江戸時代に民衆相手に盛んに絵解きされたことから、この二種の絵画が賽の河原信仰の流布に果たした役割は大きいと考えられる<sup>(16)</sup>。

## 1-3 賽の河原と富士の人穴草子

### 1-3-1 「賽の河原」の初出「富士の人穴草子」

「賽の河原」についてのまとまった記述が最初に出てくるのは、室町時代のお伽草子『富士の人穴草子』である。

正治3年（1201）、鎌倉幕府2代将軍頼家のとき、和田平太胤長は主君の命によって、単身富士の人穴に赴く。しかし、富士山神浅間大権現の拒絶にあって、やむなくひき返す。あきらめ切れぬ頼家は、再び仁田四郎忠綱を送る。主君拝領の太刀を浅間に献じ、その返礼にと洞穴内を案内される。彼の眼前に展開するのは、地獄の凄惨な呵責場面であり、あるいは金殿玉楼の極楽風景であった。浅間に洞中の模

様を口外するを禁ぜられたにもかかわらず、主君の強要にあい、並みいる武将の前で報告するや、仁田はその場で命を奪われる<sup>(17)</sup>。

ここで、『富士の人穴物語』（富山大学蔵「ヘルン文庫」、「小泉八雲」の印あり）に描かれた賽の河原の場面を紹介する。

（前略）汝の太刀を自らに糸させよと有ければ仁田承り三尺八寸の太刀を参らせ候処  
 刀をも得させよと有ければ金作りのさや斗はづし身斗なひて奉り大蛇太刀  
 と刀を六根に納め御歎は限りなし其内其姿を引かへて十八歳斗の法師と現  
 し給ひ大菩薩仰而候はいかに忠綱承われ日本の衆生地獄極楽はかどに聞  
 たる斗なり多用に見る事ありしいさ六道を見せなとていかに地獄奉行は六人有  
 先壱番は箱根権現貳番は伊豆権現三番は白山権現四番は自らなり  
 五番は越中国立山権現是は無間地獄の主六番是浅間権現にてましまして  
 されは奉行見放されたる者助り難し先さいの河原を見せなとて趣度に  
 川有三つより十二三の幼子幾千万と其数お知らず彼河原に集りて石の塔を組置  
 ば悪風出て吹出し又集めて組んとすれば河原二火煙もへ出石も河原もほのふに  
 もへおさなき者にけんとしてれば叶はず父よ母よとさけへは忽ち白骨と成なり  
 有て地藏菩薩錫杖を以てかきよせ給ひ文に云現在未来白骨いんごんふ  
 そく如来一言ふしよふたさい諸悪道と此文を唱給へは元の形に成たり仁田あ  
 れはいか成罪の者にてやと申しければあれは娑婆にて親の胎内に宿り九月の間  
 親に苦をきせ其恩おも送らす死たる者あの苦を請て九千歳母の涙たまりて  
 血の池と成又少し行て見れば河有三ずの川是也河の端に其丈拾丈斗の姥御  
 前におはします眼はしやりんのごとく上齒八重下齒八百重に水しやうの如く  
 罪人の衣装をはぎ取りてひらんちの木に懸給ふ本地大日如来の化身  
 なり此所を過て見れば山有死出の山是也登りも下りも劔にて登るべき  
 やり更になし（以下略）<sup>(18)</sup>。

### 1-3-2 「富士の人穴」と「富士の人穴草子」の意義

「富士の人穴草子」研究を最初に進めたのは、西野登志子および岩崎武夫両氏であった。これらの研究史をふまえ、詳細な富士の人穴研究を行ったのが、小山一成氏である。小山氏は、人穴草子の諸写本の発掘・収集を行い、近世後期に人穴草子の写本が頻出する現象を指摘した。それにより、近世後期の写本を次のように分類した<sup>(19)</sup>。

- I 近世後期年号入写本…宝暦12年（1762）『富士人穴物語』（甲府市山梨県立図書館蔵）など
- II 近世後期成立推定写本…『富士之人穴』（無窮会図書館蔵。本文末尾に文政十三年書写の記録あり）など
- III 明治期年号入写本…明治12年（1879）『富士山人穴物語』（河口湖町立図書館蔵。宝暦八の序、本文末に元禄十四年木氏忠左衛門の署名と花押。最終丁に「大日本帝国扶桑教会教導職口補」以下判読不能）など
- IV 年号無記入写本…『富士の人穴物語』（富山大ヘルン文庫蔵。小泉八雲印）

富士の人穴は、富士山の西麓に現存する溶岩洞穴である。古来、この世に豊穡をもたらし、死者を包む大地は母性視され、母神のうしはく領地であった。洞窟は万物生誕の場であり、同時に葬所でもあった。換言すれば洞窟は他界への通路であり、神も人も他界より来たりてここに誕生し、ここを通じて他界に赴いた。洞窟は他界あるいはこの世に誕生するために一時的に籠もらねばならない疑似母体であった。一方、洞窟の持つ死のイメージは、仏教の浸透によって地獄の思想と結合し、洞窟内に地獄ありとする観念が徐々に一般化していった。そして、疑似母体であり、万物生誕の場である洞窟は、死んで生まれかわる擬死再生の場で

あった。とすれば、富士の人穴草子を書写し、読み、聴聞することは、人穴禅定と同様にこれまで犯した数々の罪障を払拭し、清浄なる身となって再誕することにほかならなかった<sup>(20)</sup>。

富士山麓河口湖畔日蓮宗妙法寺の記録『妙法寺記』に、「明応九年(1500)。此年六月。富士導者悉ク無限。関東乱ニヨリ須走へ此道者付也」とあるように、戦国期に入り、富士への登拝が隆盛した。この頃、富士の周辺部はうち続く天災と飢饉とによって餓死者が続出し、加えて武田・北条・今川三氏の鼎立によって戦闘が繰り返されていた。富士大宮口(村山口)の道者坊は中部・伊勢・近畿地方の道者と師壇関係を結んだ。

近世に至って登拝の風はますます広域に及び、村山口には遠江・三河・尾張・近江・京都・大和・伊勢からの道者をみた。京都における富士信仰は、登拝のほか、行人による代参があった。行人の中には禅定せず鴨川における富士垢離に参加し、終了後遙拝によって登拝に代える者もあった。そして、京都市民は人穴と登拝を併せて信仰し、人穴草子は浅間大菩薩に対する經典の如き存在として信仰を集めた。その結果、草子を一度聴聞することは登拝の一度に当たり、あるいは人穴にひとたび禅定することに該当した。つまり、草子の聴聞は登拝や穴禅定の究極の目的である罪障消滅につながっていたのであり、その結果極楽往生が約束されたのであった<sup>(21)</sup>。

聴聞が禅定と同じ効果をもたらすというのは、立山曼荼羅も同様である。現存する唯一の立山曼荼羅の絵解き台本である『立山手引草』には、「今この四幅一面の画面は、高祖先達の思惟して女人を救はんその為に、色心不二を開示して、我らが心の善悪をそのまま見る目にあらはせり。心に心を問ふならば、などか此に替はるべし。うたがひやめて今しばし、敬礼供養なすならば、此の座がそのまま禅定ぞ」と記されている<sup>(22)</sup>。

#### 1-4 地藏和讃

歌謡文芸において、賽の河原における地藏尊を讃歎したのが地藏和讃である。そのうち、空也上人の作と伝えられるのが「西院河原地蔵和讃」である。しかし、真鍋広濟氏によれば、賽の河原思想は室町時代のお伽草子『月日の御本地』『ふしの人穴』『ふしの人あなそうし』などに見えるのが始まりで、それを空也作とするのは念仏の徒の仮託にすぎず、その成立は元禄9年(1696)を上限とするとのことである<sup>(23)</sup>。

##### 「西院(賽)河原地蔵和讃」(伝空也上人作)<sup>(24)</sup>

これはこの世のことならず	死出の山路の裾野なる
賽の河原の物語り	聞くにつけても哀れなり
二つや三つや四つ五つ	十にも足らぬみどり子が
賽の河原に集まりて	父恋し母恋し恋し恋しと泣く声は
この世のこととはこと変わり	悲しさ骨身をとおすなり
かのみどり子の所作として	河原の石をとり集め
これにて回向の塔を組み	一重積んでは父のため
二重積んでは母のため	三重積んでは古里の
兄弟わが身と回向して	昼はひとりで遊べども
日も入相 <small>いりあい</small> のそのころは	地獄の鬼が現れて
やれ汝らはなにをする	娑婆に残りし父母の
追善作善の勤めなり	ただ明け暮れの嘆きには
酷 <small>むご</small> や悲し <small>あびん</small> や不憫 <small>あひん</small> さに	親の嘆きは汝らが
苦患 <small>くげん</small> を受ける種となる	われを恨むることなかれ
鉄 <small>くろがね</small> の棒をとりおのべて	積みたる塔を押し崩し
また積み積めと責めければ	幼子あまりの悲しさに

まことやさしき手を合わせ	許し給えと伏し拝み
汝ら罪なく思うかや	母の乳房が出でざれば
泣く泣く胸を打つときは	八万地獄に響くなり
母は終日 <small>ひねもす</small> 疲れにて	父が抱かんとするときは
母を離れず泣く声は	天地奈落に響くなり
いいつつ鬼は消え失せり	峰の嵐の音すれば
父かと思って馳せ登り	谷の流れを聞くときは
母かと思って馳せくだり	辺りを見れども父(母)もなし
誰とてのべをなすべきや	西や東に駆け登り
石や木の根につまずきて	手足は血潮に染めながら
幼な心のあじきなや	砂をしきつつ石枕
泣く泣く寝入るおりからに	また清涼風吹けば
みな一同に起きあがり	ここやかしこと泣き歩く
そのとき能化の地藏尊	ゆるぎ出でさせ給いつつ
なにを嘆く幼子よ	汝の命が短くて
冥途の旅に来たるなる	汝ら父母娑婆にある
娑婆と冥途はほど遠し	われを冥途の父母と
思って明け暮れ頼めよと	幼き者を <small>みころも</small> 御衣の
裳裾 <small>もすそ</small> のうちにかき入れて	憐れみ給うぞ有難や
いまだに歩まぬ幼子を	錫杖の柄にとりつかせ
忍辱 <small>にんにく</small> 慈悲 <small>みはだき</small> の御肌に	抱きかかえて撫でさすり
大悲の乳房をあたえつつ	泣く泣く寝入る哀れさに
譬 <small>たえ</small> えん方なきおん涙	袈裟や衣にしたしつつ
助け給うぞ地藏尊	ことくのさくら信じ申すべきかな

『西院(賽)河原地蔵和讃』の詞章によると、賽の河原に集まった幼児等らは、娑婆の父母兄弟のために塔を積んで回向をしている。小石の塔を造るのは、『地蔵菩薩本願経』にある造塔の功德に基づいたものである。しかし、夕方になると地獄の鬼が出現して鉄棒で突き崩しては、「積み、積み」と責め立てる。手と足を血潮に染めながら父母を求めて泣き叫ぶ声は八万地獄に響き渡り、やがて泣きくたびれた子供たちは泣き寝入るが、清涼な風が吹くと起きあがる。そのとき地藏尊が現れて、「われを冥途の父母と思え」と衣の裾にかき入れ、あるいは肌に抱いて慈悲をたれ給うのである。賽の河原は子供らの地獄であり、獄卒の責め苦にあえぐ。その子供らを地藏尊がお救いくださると説いている<sup>(25)</sup>。

江戸時代になると、賽の河原の思想はほとんど地藏信仰の中心となっているような盛観を呈し、地藏信仰といえは幼児の守護を祈願するもの、或いは胎児の安産を祈るもののように考えられ、安産地藏・子安地藏・腹帯地藏等、子供に縁の深い地藏信仰となる。それに賽の河原信仰が拍車を掛け、庶民文学の読本や洒落本に、或いは狂歌・川柳・俳句などにしばしば現れてくる。

このように、中世から近世にかけて地藏信仰、とりわけ賽の河原思想が庶民に広まっていった背景は、中世の末ごろ、イエ制度の民衆レベルでの成立を背景とした子宝観念(イエの後継者としての子供)の一般化によって、親に先立ってしまいイエを継げないという未報恩の罪を犯した罪人としての子供の亡者の墮ちる地獄「賽の河原」の信仰が生まれた<sup>(26)</sup>。「賽の河原地蔵和讃」の原形は近世初期には成立し、唱導・歌謡・芸能などの世界で唄われ広まっていったものと思われる<sup>(27)</sup>。

## 2. 地藏信仰

### 2-1 地藏信仰と現世利益

地藏信仰は、『地藏十輪經』や『地藏菩薩本願經』、『占察善惡業報經』、『延命地藏菩薩經』などの經典に拠っている。

そのうち、『地藏菩薩本願經』（隋・唐時代に中国で漢訳）には、「南方清潔の地に於て土石竹木を以てその龕室を作りて、この中に塑画ないしは鉄を以て地藏の形像を作り、香を焼きて供養し贍礼・讚歎せば、この人居る処にして即ち十種の利益を得む。何を十となす。一は土地豊かに壤（穰）り、二は家宅は永く安らか、三は先亡は天に生まれ、四は現存する者は寿（齡）を益し、五は求める所は意を遂げ、六は水火の災無く、七は虚耗を辟除す、八は悪夢を杜絶し、九は出入りには神が護り、十は多く聖因に遭ふ（地神護法品）」とあり、造寺・造塔・造像・供養・礼拝・讚嘆すれば、「十種利益」が得られると説いている。また、『延命地藏經』（平安末期に日本で撰述）は「地藏の十福」として、「女人泰産・身根具足・衆病悉除・寿命長遠・聡明知恵・財宝盈溢・衆人愛敬・穀米成熟・神明加護・証大菩薩」を掲げている。

地藏信仰が中国から日本にもたらされたのは奈良期初頭かそれより少し前とされており、奈良期から平安期にかけては、地藏悔過や地藏講あるいは盂蘭盆会の実修を通しておもに貴族層に受容された。平安中期ごろから次第に民間に浸透し、鎌倉期に入ると民俗宗教として大展開をとげるにいたった。そのことは、『地藏菩薩靈驗記』（11世紀、実叡撰）やそれをうけた『今昔物語集』（12世紀前半）、『沙石集』（無住撰、鎌倉時代）などの仏教説話集収載の地藏説話や、「地藏菩薩靈驗記絵（詞）」や矢田寺などの寺社縁起収載の地藏靈驗譚が如実にものがたっている<sup>(28)</sup>。地藏は六道の能化として生死流転してやまない輪廻の衆生ひとりわけ悪趣に堕ちた衆生を教化し地獄の苦患を助けたまい、かつ現世利益をもたらす菩薩として、身分を問わず広く信仰されたのである。

室町期以降、地藏信仰の世俗化が急速に進むにつれて、靈驗譚の類いが数を増し、江戸時代には京・江戸など大都市の寺院が靈驗譚を集成した縁起を版行して、世俗的地蔵信仰の宣揚に乗り出した。その中には、立山地獄を舞台とする亡霊回向譚があるが、そこでは現実の立山の火山原が地獄になぞらえられている。地表上の特異な地相を地獄とする他界観は、在来の山岳信仰ないし山中他界信仰と仏教の習合になったもので、地藏信仰によって潤色されている<sup>(29)</sup>。

### 2-2 生身の地藏

地藏は、地獄に堕ちた衆生を救済するだけでなく、娑婆でも活躍し、人びとに様々な現世利益をもたらす。しかも、地藏はときに「生身」の地藏としてこの世に出現する。生身とは仏教語としては「しょうじん」と読み、仏菩薩が衆生済度のためにこの世に父母から生まれた肉身、または神通力で一時化現した肉身をいう。

『延命地藏經』には、「毎日晨朝に諸の定に入り、六道に遊化して苦を抜き楽を与ふ」とある<sup>(30)</sup>。地藏は、その住まいである閻魔庁の善名称院にとどまらず、六道を動き回って衆生を救済していること自体が、地藏が「生身」であることを示している。

さて、「生身の地藏」としてまず思い浮かぶのは、地獄で苦しむ衆生の前に現れて、その身代わりとなって責め苦を受ける地藏であろう。『今昔物語集』巻十七「越中立山の地獄に堕ちし女地藏の助を蒙る語第二七」で、「地藏菩薩此ノ地獄ニ来リ給テ、日夜三時ニ我ガ苦ニ代リ給フ」とあり、女人に代わって炎と剣の山の責め苦の代受苦を受ける場面が、「地藏菩薩靈驗記絵」（鎌倉時代、フリア美術館蔵）に描かれている。

より典型的な生身地藏譚は、「生身の人間」が住むこの娑婆世界で「生身の地藏」に出会うことであろう。『今昔物語集』巻十七第一話「地藏菩薩の変化に値愚せんと願ふ僧の話」は、「生身の地藏」に出会うことを願う熱心な地藏信者がその願いを叶える話である。

西の京の地藏信者の僧が生身の地藏に会い引接<sup>いんじょう</sup>（仏・菩薩が往生者を浄土に導くこと）に預かりたいとの願いを起し、地藏の霊驗所を訪ね歩き、常陸国で賤しい下人の家に宿を借りた。その家には老婆と、地藏丸という名の15、6歳くらいの身寄りのない牛飼いの童がいて、よく主人に折檻されるという。僧は「この子こそ地藏の化身ではないか」と思い、一晩中地藏を念じていると、夜中にこの子が起きあがり、「自分はあと3年この主人に折檻されるはずであったが、今あなたにお会いできたので、これからよそに行く」と言って外へ出て、かき消すようにいなくなってしまった。僧は、童が地藏の化身であったことを確信したという<sup>(31)</sup>。

「生身の地藏」の霊驗譚としてもっとも取り上げるべきなのは身代わり地藏の話である。身代わりの信仰や説話は他の仏・菩薩にもあるが、地藏には特に多く、地藏信仰の特色の一つとなっているからである。典型的な身代わり地藏の話として、『宝物集』（鎌倉時代初期、平康頼撰）巻四には「田植え地藏」の話が見える。

西坂本に住む老女が5、6寸の地藏像を麻糸の箱に納めて、いつも食前にご飯の一部をお供えしていた。彼女は田んぼを2反持っていて、いつもは息子が作っていたが、どうしたのか、6月まで作らなかったの、「地藏が人間でいらっしやったら田を作ってくれるだろうに」と嘆いて寝た。夜が明け、「昨日まで何もしていなかった田を、夜の間に植えている」という人の声がしたので急いで行ってみると、はたして自分の田が植えられてあった。よく見ると鼠の足跡のようなものが残っている。地藏がなされたことだと思い、地藏像をみると、御足に泥が付いていた<sup>(32)</sup>。

地藏は、数ある仏・菩薩のなかでも、例外的に僧形という人間的な姿をしている。おそらくそのことと関係して、地藏は人間に最も近い仏と認識されてきたようである。そのことは、地藏と人間との一体性を物語る生身地藏譚や地藏応化譚という、ほかの仏には類例のない話型の存在や、地藏の化身が活躍する霊驗譚や生身地藏が活躍する霊驗譚における、ある意味人間的ともいえる地藏の行為・活動にも端的に表れている。地藏菩薩は、もっとも人間に身近な人間くさいほどけくお地藏さんとなり、この娑婆に生きていと信じられていたのである<sup>(33)</sup>。

### 3. 地藏と民話

#### 3-1 地藏の名字

地藏は様々な名号・名字を冠して呼ばれる。『総合日本民俗語彙』（全5巻）は90種に余る地藏名彙を収めているが、実際はさらに多い。石川純一郎氏は、地藏名彙をいろいろの要素によって分類している。

- ① 現世利益に関する名字のもの
  - a. 諸願（延命招福・抜苦息災）…延命地藏、火除け地藏など
- ② 現世利益に関する名字のもの
  - b. 身代わり（救難・加勢）…身代わり地藏、代掻き地藏など
- ③ 現世利益に関する名字のもの
  - c. 子授け・安産・子育て祈願…子授け地藏、安産地藏など
- ④ 現世利益に関する名字のもの
  - d. 疫病除け・治病祈願…疱瘡除け地藏、咳地藏など
- ⑤ 祭祀・願掛け・願果たし方法などに関する名字のもの
  - 日限り地藏、縛り地藏など
- ⑥ ト占・予兆などに関する名字のもの
  - 抱き地藏、汗かき地藏など
- ⑦ 怪異・靈異現象、奇行・祟り・懲罰に関する名字のもの



酒買い地藏、祟り地藏など

- ⑧ 向いている方角などに関する名字のもの  
朝日地藏、南向き地藏など
- ⑨ 在所（地名）・山号・寺号・人名などに関する名字のもの  
峠地藏、矢田地藏など
- ⑩ 形状・色彩・数などの外形上の特徴に関する名字のもの  
笠地藏、六地藏など
- ⑪ 出現・創祀伝説などに関する名字のもの  
夢見地藏、人柱地藏など
- ⑫ 追善供養に関する名字のもの  
引導地藏、水子地藏など
- ⑬ その他の名字のもの  
旅立ち地藏、親子地藏など

名字を冠して呼ばれる地藏の名彙は延べ400種に余り、そのほかに名字のない地藏が無数にある。まさに地藏は祈願・功德・祭り方・願掛け方・形態のあらゆる面で多種多様であり、しかも祈願・功德のほとんどは現世利益にかかるものである。地藏の名字は民衆の願望を映した信仰の鏡と言え、地藏が日本人の心の中に生きている身近な仏であることを示している<sup>(34)</sup>。

### 3-2 地藏の昔話

民衆の生活から生まれ、民衆によって口承されてきた民話。親から子へと語り継がれてきた昔話も、民話の一部である。昔話には、様々な「生身的地蔵」が登場する。その中でも「笠地藏」は最もよく知られた昔話のひとつであろう。「笠地藏」の民話は日本各地に残っている。名前が多少変化したものもあるが、基本形は、貧しい正直な爺が米代で笠を買い（あるいは自分たちで作った笠が売れ残り）、濡れている地藏に笠をかぶせて幸運を得る話。多くは年の暮れの話になっている。地藏の数は、一体の場合もあるが、多くは六地藏である<sup>(35)</sup>。六体であるのは、地藏信仰で六道の衆生を救済することからきていると考えられる。

地藏は、辻（道が十文字に交差している所）あるいは村の境に祀られることが多い。「辻」に地藏が立てられるようになるのは平安時代の終わり頃からである。『明月記』（建永元年（1206）八月二十一日の条に「今日称御霊有辻祭」とあるように、古代末から中世初めにかけて辻での祭が多く見られる。辻は霊の集まり潜む場所、特殊な場所であったが、集まり来る霊は悪鬼とも善鬼とも、また種々様々な妖怪、さらには神とも思われていた頃、辻で迷える霊を導くために、日本的な御霊信仰と仏教がいっしょになって地藏信仰が盛んになると、辻に地藏を立てられるようになった。これが今も各地に残る辻地藏の起源と思われる<sup>(36)</sup>。一方、「境の場所」は、富がもたらされ、盆に精霊の往来する場所であるだけでなく、病気や災厄などの悪しきものを此の世から切り離す場所ともなる。例えば、盆の精霊送りの習俗と虫送りや病送りは、ともに「境の場所」で行われた<sup>(37)</sup>。そのような「境の場所」に置かれた地藏が、貧しいが心優しい爺と婆に幸福をもたらすのである。

富山にも射水地方に伝わった地藏民話が『【新版】日本の民話35 越中の民話 第一集』に収録されている。方言で語られる話は、内容は他と同じでも、その地方独特の味わいがある。

「地藏さまの恩返し」（射水郡）

むかし、あるところに貧しいじいさまとばあさまがいましたとお。

大みそかになりましたが、餅をつくお金もありません。ふと、つくっておいた笠が七つばかりあったのを思いだし、しかたがないからその笠でも売って米にかえることにしようと、相談しました。

じいさまが笠売りに町へ出かけようとしたとき、あいにく雪が降ってきましたので、一つだけかぶって、残りの六つを売りに行きました。

寒い中を一日じゅう売り歩きましたが、だれひとり買ってくれるものがありません。じいさまはしょんぼりしてもどってきました。

ところが、道ばたに地藏様が六体、何もかぶらないで雪の降るなかに立っているのが目につきました。

じいさまは、吹きさらしの地藏さまをそのまま見すごして通る気になれないので、持っていた笠を六つみんなていねいにかぶせて、ホクホクしながら家へ帰ってきました。

そして、

「おら、笠一つも売れんで、米ちゃんあん買うてこなんだれど、道で地藏さまたちが雪のなかに立ってやはるが見たところが、あんまるにも気の毒でのおお、持った笠もなんか進上して帰ってきたて」といいました。ばあさまも気のよい人でしたから、

「そりゃええことせはった。何ものおても気持ちようらと正月すりゃ、そっよかええもんないちゃ」といって、お米の買えなかったことも忘れて満足していました。

その晩は、じいさまもばあさまも早く寝てしまいました。

夜中に二人が目をさましますと、外はものすごい吹雪になっています。ところがそのふぶいているなかで、何やらわいわいと餅をついているような音がして、だんだんこっちへ近づいてくるようでした。

「こんなまああん、ひどい荒れにだりゃまた何しとんがやる」

というていると、どうやら自分たちの家の前のようでした。そのうちに、

「粟餅一うすぺったらこ、豆餅一うすぺったらこ、ぺったら、ぺったら、ぺったらこ」

という歌まで聞こえてきました。じいさまもばあさまもびっくりして、

「よおう、餅かつやがえ、だれじゃろかのおん」

というていると、家のあがり戸の方で、ドサンと大きい音がしました。どうしたのだろうと思って、二人ともとんでいって見ますと、今ついたばかりの餅が山になっているではありませんか。

「ええっ、こりゃだっじゃい」

というて戸をあけてみしたら、六体の地藏さまたちが、昨日じいさまのかぶせた笠をかぶって帰って行かれるところでしたとおお。

じいさまとばあさまは、地藏さまたちからもらった餅で、ほんとうによいお正月をしました。

(はなし 伊藤タメ、黒田弥一郎)<sup>(38)</sup>。

### 3-3 富山の地藏民話

地藏信仰は民衆の間に広く浸透し、そのため、地藏が登場する民話や昔話が、日本各地に伝わる。富山県内に伝わる民話の中にも、地藏にまつわる民話・昔話も多い。県内の民話を集めた民話集のひとつに、『伝説とやま』(高瀬重雄監修)<sup>(39)</sup>には、(一)神々の伝説1~36、(二)仏たちの伝説37~72、(三)山の伝説73~132、(四)水の伝説133~220、(五)火の伝説221~236、(六)石の伝説237~264、(七)動物の伝説265~306、(八)植物の伝説307~350、(九)妖怪の伝説351~398、(十)人々の伝説399~464と、464話もの伝説が収録されている。そのうち、地藏にまつわる伝説は21話あり、その概要を後の表にまとめてみた。興味のある方は、図書館等で手にしてみられるとよい。

## おわりに

以上見てきたように、立山信仰において地蔵信仰は非常に大きな比重を占めるものであった。『研究紀要 Vol. 23』でも触れたとおり、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけては、立山では地蔵菩薩が衆生の救済者と考えられていたが、やがて阿弥陀信仰が入り込み、13世紀初頭頃には、六道抜苦と現世利益を説く地蔵信仰と、極楽往生をかなえる阿弥陀信仰が、補完的・重層的関係が見られるようになったと考えられる。

「立山曼荼羅」を見ても、立山の山並みの上に描かれる阿弥陀如来の来迎はひときわ目を引くが、別山の麓付近に描かれる賽の河原で幼子を救済する地蔵菩薩も、多くの「立山曼荼羅」に描かれており、その重要度がわかる。「立山曼荼羅」には、他にも如意輪観音、娑尊、閻魔王など、様々な仏尊や神格が登場するが、その中で、地蔵菩薩は、芦峯寺集落や立山山中に多くの地蔵像が寄進されるなど、庶民から篤い信仰をうけた。

さらに、『富士の人穴草子』のようなお伽草子や、地蔵和讃、『笠地蔵』などの民話・昔話にもとりあげられ、人々の間に広まって「身近な地蔵さま」として信仰された。そういった地蔵信仰の一端を、「立山曼荼羅」の「賽の河原」の場面を通して見てみた。

## 【註】

- (1) 佐伯幸長『霊峰立山』（富山開発鉄道株式会社・富山県立山鎮座雄山神社神光会、1959）49～51頁
- (2) 佐伯立光『立山史談』限定版300部（非売品）、1965）87頁
- (3) 『平成9年度 立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二） 地獄谷・賽の河原』54頁。
- (4) 本田和子『「賽の河原」考』204頁（『怪異の民俗学8 境界』小松和彦責任編集、河出書房、2001）
- (5) 渡浩一『お地蔵さんの世界』慶友社、2011）93頁
- (6) 本田 前掲書205頁
- (7) 渡 前掲書86頁
- (8) 渡 前掲書70頁
- (9) 本田 前掲書 212～215頁
- (10) 渡 前掲書102頁
- (11) 渡 前掲書103頁、立山博物館開館10周年記念資料集『地獄遊覧』42頁
- (12) 鷹巣純『「六道絵」の図像構成に関する研究—六道・立山・山中他界—』11頁
- (13) 鷹巣 前掲書25頁
- (14) 鷹巣 前掲書27頁
- (15) 渡 前掲書118頁
- (16) 渡 前掲書123頁
- (17) 小山一成『富士の人穴草子—研究と資料』文化書房博文社、1983年）22頁
- (18) 『富士の人穴物語 上・下』（手写本）（富山大学「ヘルン文庫」蔵、書架番号2276-2277）
- (19) 小山 前掲書63～66頁
- (20) 小山 前掲書33頁
- (21) 小山 前掲書56～59頁
- (22) 『立山手引草』嘉永7年（1854）、岩峯寺延命院所蔵
- (23) 眞鍋広済『地蔵菩薩の研究』（三密堂書店、1960年発行、1987年重版発行）61頁
- (24) 石川純一郎『地蔵の世界』（時事通信社、1995年）138～141頁
- (25) 石川 前掲書135頁
- (26) 渡 前掲書96頁
- (27) 渡 前掲書101頁
- (28) 石川 前掲書197～198頁
- (29) 石川 前掲書201～204頁

- (30) 渡 前掲書39頁
- (31) 渡 前掲書41頁
- (32) 渡 前掲書61～62頁
- (33) 渡 前掲書69頁
- (34) 石川 前掲書47～52頁
- (35) 岩崎敏夫『柳田国男の分類による日本の昔話』(角川書店、1977) 3頁
- (36) 笹本正治「辻についての一考察」(『怪異の民俗学 8 境界』(小松和彦責任編集、河出書房出版、2001) 139頁
- (37) 八木、前掲書185頁
- (38) 『【新版】日本の民話35 越中の民話 第一集』伊藤曙覧・石崎直義・佐伯安一編、(未來社、1977初版、2016新版) 162頁
- (39) 『伝説とやま』(高瀬重雄監修、北日本放送、1971)

## 『伝説とやま』に描かれる地藏（高瀬重雄監修、北日本放送、1971）

名称	場所	内容
1 橋守り地藏	朝日町泊	笹川橋は毎年のように流された。ある夜、部落の人が橋を通ると、橋下に光る石がある。拾ってみると立派な地藏様で、これを橋の守り神にしてからは橋は流されることはなかった。
2 おこり直しの地藏	朝日町泊	泊の横尾におこりを直してくれる地藏様がある。供えてある地藏のお飾りの石を1つ借りてきて、翌朝石を入れて水を飲めば直る。直れば、お飾り石を9倍にしてお返しする習わしであった。
3 子育て地藏	黒部市三日市	黒部市荻生の道端に小さなお堂があり、地藏様が祀られている。あるとき、懐妊した女性がここで亡くなり埋葬した。夜な夜な赤ん坊の泣き声が聞こえるので掘り返すと、死んだ婦人の腹から赤ん坊が出てきた。それ以来、懐妊した婦人が安産のお参りをするようになった。この地藏尊は立山に向かって立っている。
4 おこり地藏	黒部市三日市	どんなおこりでもお参りすれば必ず癒る。なお生地に大将塚があり、この塚に登ると逆におこりになると伝えられている。
5 雨乞い地藏	魚津市西布施 梅昌寺	岩瀬の某寺の池の中にあつたのを、道坂に移し、のちにこの池へ移した。乾天が続いて水の欲しいときには、片貝側流域の百姓がみんな集まり「龍」と書いた三反旗を立てて地藏様に詣ると大雨となる。
6 歯痛み直しの地藏	魚津市西布施	西布施の長引野の地藏様は、歯のうずくときに豆を一握り炒って供え、「この豆の芽がはえるまで歯がうずかないように」とお願いすれば必ず直るといふ。
7 夢枕の昭和の地藏	魚津市松倉	昭和4年10月10日ころから、毎夜のように野崎庄三という若者の夢枕にやぎひげの老翁が現れて「われは宝田の地藏である。境内が狭く窮屈で困っている。すこし拡張してくれ」と夢のお告げが続いた。このことを付近の人に話して、敷地が拡張された。
8 稗田の地藏さん	上市町上市	五百石街道の横に一体の地藏が建っている。昔、このあたりは荒れた川原で、狐が出て人をだまして人々を悩ませた。地藏を安置して災難の無いように願を掛けるとご利益あらたかたで、日暮れて難儀する人々を人家のあるあたりまで見送りされたとのことである。
9 石仏の橋地藏	上市町宮川	部落の中央に「地藏さま」のお堂があり、その前に魚津～滑川街道・岩瀬～水橋街道・上市～五百石街道の分岐点があつて、道に迷う者が多かった。ある晩、地藏さまが老婆の夢枕に立たれ、「道を間違ひ、困り果てる者を救うてやりたい。そのため、地藏を橋にせよ。橋を通る人は、その上に立つと自分の通る道が心の中に浮かぶであろう。」と告げられた。それから迷う者がいなくなった。
10 銚木の地藏さん	立山町利田	利田の銚木一帯は、むかしうっそうとした松林で、狐や狸に悩まされた。魚売り達が地藏尊を立てると止んだという。ある夜、子供の百日咳に悩んだ母親の夢のお告げに「子供の病気を治してやるから、水を供えてお参りするがよい」とあり、その通りにすると間もなく全快した。
11 利田の乳地藏	立山町利田	昔、館家の人が近くの雑木林を開墾していると、地中から三体の地藏尊と茶釜が出た。あるとき尼僧に夢のお告げがあり、「お地藏さまを拝すれば乳がさづけられる」とあつた。お米を供え、賽銭をあげてお参りし、供えたお米を持ち帰って朝かゆにして食べると乳が出るという。
12 永昌寺の耳地藏	立山町大森	西大森の永昌寺に耳地藏が安置されていて33年に一度開扉されている。この地藏は首から上の病、ことに耳の病に靈験があると伝える。明治以前、この地藏さんは立山の麓芦峯寺の三途の川原に立ておられた。村の外れに貧しい一家があり、妻は3つの子を残して死んでしまった。その後、後妻をもらったが、自分の子にだけ腹一杯食べさせ、先妻の子には与えなかった。先妻の子が7つになったとき、食べ物をねだったところ、小さなおにぎりをやって「もし三途の川の地藏様がこのおにぎりをたべられたら、お前にも食物をやる」といった。子供は地藏様のところに行くが、口まで届かない。そこで川原の石を集めて踏み台を作り、口元へ持って行くと、地藏様は大きな口を開けてうまそうに食べられた。帰って母に伝えると、「お前はうそをついている」とせつかんされ、もう一度行ってこいとおにぎりを渡した。子供のあとをつけてようすをうかがうと、地藏様はまたおにぎりを食べ、はらはらと涙をこぼされた。これを見た母親は心からわび、それからは自分の子とわけへだてなくかわいがるようになった。しかし、前にせつかんしたため耳が聞こえなくなつたので、治してもらおうと地藏様にお祈りしたところ、17日間全快したという。
13 肩掛地藏	立山町上段	日中部落の永代というところに二体の地藏さんが肩を掛合している。村の人に家具を貸した枕伝説がある。
14 おこりを落とす橋地藏	富山市小泉町 大田口町	この村に滑川・水橋・五百石への分かれ道があり、道に迷う者が多かった。道祖神の地藏様はたいそう悲しく思われ、自分を橋にせよと告げられた。その後、迷う者がいなくなった。
15 最勝寺の火消し地藏	富山市蛸川	曹洞宗の古刹最勝寺を建てるとき、敷地内のもと分かれ道の角に立っていた石地藏の位置が、かまどの傍になるから他へ移そうとした。これを聞いた一休和尚は、「今までは分かれ道だから往来の人を濟度したろうが、これからは寺の坊主がする。かまどの傍だから何の役にも立たない。ぶち割って潰け物の押せ石にするがよい。」といつたので、地藏はたらたらと満身に汗を流した。すると一休は「分かれ道には分かれ道の役目がある。かまどに建てればかまどの役目がある。」といつて、筆をとって「地藏地藏、汗かき地藏、かまどの前の火消坊」と地藏の背中に書いた。この後、幼子が炉の中に入ったのを助け上げたり、お寺の庫裏から火が出たとき、夜中で僧侶が眠っていたのを、地藏がかけ回って人を呼び起こして火を防いで大事に至らなかつたと伝える。
16 三ガの地藏	小杉町三ガ	三ガの某家の娘が胸の病で死んだ。そのころ高木の一本杉に鬼が住んでいるといわれた。鬼は、京都に向かう僧侶に「小杉の某家に寄って待っているように伝えて欲しい」と頼んだ。僧侶は高木の橋のところで某家の娘に会い、「この先で鬼が待っている。この袈裟を着ていけば害はないであろう」と袈裟を渡した。娘は代わりに着物の片袖を切ってくれた。僧からこの話を聞いた主人が棺を開けてみると、大事に袈裟をかけており、タンスを見ると袖が切れていた。某家は、この僧を手厚くもてなし、地藏を作って供養したという。
17 佐賀野の地藏	高岡市国吉	佐賀野村の農家助左エ門の奥庭に安置される60cmの石像。先祖は深山左衛門尉という郷士で、大伴家が国守のとき、政所をとり、常にこの尊像を敬い、人に害を及ぼすことがないことを祈っていたという。
18 水難除けの地藏	氷見市	氷見漁港から108mの海上に「唐島」があり、島の登り口の左手の崖に石地藏が安置されている。天候悪化の前兆があると地藏尊が不思議な光を放たれ、漁師たちは急いで浜へ引き上げた。
19 箸を奉納する地藏	砺波市鷹栖	大矢の地藏堂内に箸がたくさん奉納されている。この箸で歯の痛むところを触ると、痛みがとまるというのでよく知られている。治った者が箸を奉納するので、いつも箸がたくさんあるということだ。
20 子安地藏	砺波市鷹栖	幼児を抱いた姿の地藏。ある人の妻が乳飲み子を残して死んだ。夜になると乳ほしさに泣きじゃくる児のいじらしさに、夫も泣いた。ある夜、亡くなった妻が現れ、児に乳を与えた。この児が成人して、亡母の慈愛に報いようとして建立した。
21 美代地藏	福岡町	大聖寺山の麓の袋谷に美代地藏がある。山仕事をする勘助は妻を亡くし、娘の美代と2人で暮らしていた。ある日、娘の美代が狼に食われ、かたきを取ろうと考えた。年が明けて袋谷で探し求めていた狼を見つけ、死闘を繰り広げて鎌で斬り殺したが、勘助も力尽きて倒れた。村の人たちはお地藏さんをつくり親子の霊を弔い、娘の名前をとって美代地藏と名づけた。